

令和 6 年 5 月 2 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12948

研究課題名（和文）インド初期仏教における涅槃の文献学のおよび学際的研究

研究課題名（英文）Philological and Interdisciplinary Studies on Nibbana in Early Buddhism

研究代表者

富田 真理子（Tomita, Mariko）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・招へい研究員

研究者番号：20837273

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000 円

研究成果の概要（和文）： 初期仏典における涅槃の語彙を網羅的に分析し、かつ学際的アプローチの導入により、インド初期仏教における涅槃の概念に関する新たな知見を提供することを目的とした。その成果として、註釈文献では、生前・命終で区別する二種涅槃界の教義が確立しており前提とされるが、初期経典においては、生前の涅槃に主眼がおかれつつも、涅槃の時点は曖昧に語られる場合が多いことを初めて指摘した。しかしながら、当初より、人々の関心は命終後の境涯であり、涅槃や修行の完成は命終時であると考えられていたことが文献中に確認でき、この考えが、信仰や祈りの場である仏教美術に反映されたと推測した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

初期経典で描かれる涅槃の諸相（生前、時点が曖昧、命終、二種涅槃[1経のみ]）と、註釈で説かれる生前・命終で区別する確立された二種涅槃[界]の教義とは、その涅槃観が異なる場合も多いことが、これまでにない知見として明らかになった。その中で、ゴータマ・ブッダの真意が生前の涅槃であっても、当初から人々の解釈が涅槃や修行の完成を命終と結びつける傾向が見受けられ、信仰・祈りの場である遺跡の現場でも涅槃＝命終が求められたと推測できる。

涅槃は、画一的に理解され得る概念ではないことを明示した本研究は、従って、学術的並びに社会的に、意義が認められる。

研究成果の概要（英文）： This research philologically analyzes Nibbana-related words in the Suttanipata and other early Buddhist suttas. My findings were compared with interpretations of the Commentaries. As a result, a new understanding was suggested: The sutta authors, unlike the authors of the Commentaries, often times do not intend to differentiate between Nibbana in the present life and Nibbana at and after the end of life.

While people were mostly concerned with the afterlife and connected liberation to the end of life, the Suttanipata and other early suttas sometimes emphasize that Nibbana can be attained during one's lifetime and sometimes do not express the time of Nibbana. In the latter case, the interpretation of Nibbana was left upon the listeners. This notion among people since early days was seemingly applied to the early Buddhist artifacts around 3 - 2 centuries B.C.

研究分野：仏教学

キーワード：インド仏教 初期仏典 パーリ聖典 涅槃 スッタニパータ 註釈 パラマッタ・ジョーティカー 仏塔

1. 研究開始当初の背景

(1) 仏教において究極の目的とされる涅槃は、本邦では、命終、いわゆる死と結びつけてとらえられる。しかし、文献学において、ゴータマ・ブッダ(紀元前5世紀頃)やその直弟子が説いたとされるインド初期経典中の涅槃に関する先行研究は、後代(5世紀頃)の成立とされる註釈の解釈に準じ、生前および命終の二時点を認め、前提としつつも、いずれが真の涅槃かと未だ論争が続いている。生前の涅槃との主張(宇井伯寿、片山一良、A. Wynne 等)に対し、藤田宏達 は「人間存在全体の消滅」である解脱者の死、つまり命終の涅槃が真の涅槃であると論じる(他には並川孝儀等)。

(2) この論争は文献学においてはいまだ決着を見ないが、仏教美術の学術分野においては、涅槃=命終が前提であり、本邦における一般的理解に準じる。現存最古とされるサーンチーの仏塔(紀元前3~2世紀)においても、ブッダの涅槃を表す浮彫は完全なる消滅の「象徴的」表現であるとされる(宮治昭 1979)。経典に説かれた涅槃と涅槃を表す遺物および信仰の現場の有様や背景をつなぐ研究は、各学術分野の狭間で、進展していないように思われる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、初期仏典における涅槃に関連する語彙を網羅的に分析することで、ゴータマ・ブッダの真意は何であったか、初期仏教教団がいかに涅槃を捉えていたか、および二種涅槃[界]はどのように成立したかを明らかにすることを試みる。

(2) さらに、実際の信仰の現場で、涅槃がどう理解され具現化されたのか。この同様に重要な問いの答えを、仏教美術の分野と有機的に連携を図り、現地調査を行い明らかにすることを試みる。

(3) そして、本研究を通して、涅槃の全容解明に資する新たな知見を提供することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、初期仏典、特にパーリ聖典を主資料として、かつ『スッタニパータ』(Sn)を基本資料としつつ、涅槃の諸語彙を網羅的に分析する文献学的アプローチを採用する。該当用例の出典調査と収集については、A Critical Pali Dictionary (V. Trenckner et. al.)やコンコードダンス、文献索引の他、電子検索を用いて抽出し読解する。その際、経典群あるいは韻文・散文の違いにおける涅槃の時点や涅槃観の異同を調査する。具体的には、経典全体の文脈、語彙の意味、時点、消える要素、発話者は誰か、用法および文法、共に現れる表現(涅槃の定義文に現れる「煩惱の滅」「無所有」「取り込まないこと」「島」「理解力」「生死(輪廻)の停止」)に関して分析し、各用例を考察する。さらに、先行研究の周辺議論を整理し、註釈の説明の他、同様の内容の併行文献について、パーリ聖典のみならず、漢訳経典等も調査して提示する。

(2) 仏教美術の分野と連携を図りつつ、現地調査を行い、涅槃を表す遺物である仏塔および浮彫に関して、涅槃の意味の特定およびその製作背景や信仰の有様を探る学際的アプローチを採用する。インド現地調査は、初期仏教の影響が残り、無仏像時代の仏塔であるサーンチー(紀元前3世紀頃)およびパールフット(紀元前3~紀元後1世紀)の涅槃に関する遺物を観察し、文献学から得た知見を活かし、仏塔の位置づけと涅槃に関連する浮彫の意味を考察する。

4. 研究成果

(1) 初期仏典における涅槃を表す語彙間の語義および用法の異同および涅槃の時点(生前、命終、時点の区別なし)を調査・分析した結果、涅槃の多義性と多層性が提示された。これは初期仏典における涅槃観と、後代に成立した二種涅槃[界]を前提とする註釈の理解との間に、時に相違があることを示し、註釈の解釈に準じて、経典の意味を理解しようとする従来の研究手法では、涅槃に関する正しい理解ができていない可能性があることを示唆するものである。

(2) 文献学における先行研究の大半は、そもそもは生前の涅槃=覚りの時点を意味していたが、次第に解脱者の死(般涅槃や無余依涅槃とも言う)を表すようになった。また、涅槃の原意である「消える」の意味は、「人間存在全体の消滅」であると論じる(藤田宏達 1988 等)。そしてそれはブッダの入滅が契機であった(K. R. Norman 1996 等)とする。この反論として片山一良(2001)は、二種涅槃説は後代の「誤解」であり、その違いは五蘊(心身)の有無の区別による単なる呼称にすぎず、涅槃に二種なく、解脱者の「死」という言葉も概念も成り立たないとする。本研究を通して、涅槃の原意は、そのモノや人全体の消滅ではなく、厳密には燃えているそのモノの火が消えること、または、その人の火的要素が消えることである[榎本 2012]ことが確認され

た。また本研究の成果として、Sn の註釈『パラマツタ・ジョーティカー』(Pj) は、涅槃の時点を生前と命終で区別する二種涅槃[界]の教理を前提とした、全般的に整備された教理体系に沿った解釈であること、一方、Sn から読み解ける涅槃観は、その時点が生前か命終か明確に判別できない用例が多数確認されることを初めて指摘し、このことは涅槃が最古層において、現世の文脈でありながら、煩悩の滅のみならず、「老いと死の滅尽」とも定義されることに起因すると分析した。さらに、Sn 中の定義に照らすと、涅槃かどうかさえ定かではない用例も存在し、Sn と Pj の間に涅槃観の変遷が見られることを提示した。

(3) 筆者の考察結果において、生前の涅槃 = 覚りの時点の意味する用例がある中で、涅槃の時点がはっきり特定できず、時点が意識されていない場合も多く存在すると、従来にはない指摘をした。解脱者に「死」があてはまらないとの文献学的事実(例: Sn204, 225, 228; 635; 755; 1094, MNI p. 187 偈文, ANI p. 142 偈文; AN III p. 311 偈文他)から、上記片山説も理解され得るが、二種涅槃界も文献に説かれるため、片山が主張する「誤解」とはいえないと考える。涅槃の概念に関して網羅的に調査し、その意味や展開および変遷を考察した結果、そもそもゴータマ・ブッダの時代から、人々の関心は死後の境涯であり、真の涅槃や修行の完成は命終時に得られるという考え方が広くあったことが、韻文經典から確認された。そのような状況下で、ブッダ世尊は、生前で得られる涅槃および時点が判別できない涅槃を説いていたこと(判別できない涅槃に関しては、聞く者の判断にまかせられていたことを示唆する)、さらに、韻文に比べ散文經典では、大般涅槃經(DN II pp. 72-168 [第 16 經])をはじめとして明らかに命終のみを表す涅槃の語彙が多く現れるようになること、加えて、修行者や在家信者が、生前に涅槃を得ず亡くなる場合、来世に様々な行先があると説かれるようになり、涅槃の教義が多様化することが確認された。

(4) 二種涅槃界への展開に関して、初期仏典の終盤に成立したとされ、唯一、有余依涅槃界および無余依涅槃界という二種涅槃界が説かれる『イティブツタカ』第 44 經(pp.38-39)を詳細に考察した。その際、註釈的聖典『ニッデーサ』も検討に加え、二種涅槃界の教理がそこでは説かれていないことを確認し、従って、本教理が広く確立するのは、註釈文献の成立まで下ることが明らかとなり、初期仏典中に説かれた『イティブツタカ』第 44 經は特異な經であることが浮き彫りとなった。また、二種涅槃界に関して漢文經典についても検討した結果、パーリ文献では修行完成者である解脱者の生前の状態を表す「有余依涅槃」という術語は、まだ涅槃を得ていない修行半ばの「不還」の状態であるとの異なる解釈も存在することが確認された。

(5) 初期仏教美術分野における涅槃は命終あるいは命終後を表す概念であることが本研究においても確認されたが、文献においては、初期仏典の前期には生前の涅槃(= 悟り)がゴータマ・ブッダによって説かれるとともに、涅槃の時点が曖昧にされる場合も多いこと、さらに、初期仏典の後期になり、命終の涅槃が表されるようになったことが明らかになった。とはいえ、初期のゴータマ・ブッダの時代から人々の間では、命終後の境涯に関心が向けられ、涅槃あるいは修行の完成を命終と結びつける傾向が文献から確認でき、このような一般的涅槃観に準じる形で、紀元前 3 世紀ごろから確認できる無仏像の初期仏教美術においても涅槃 = 命終との解釈が採用されたと推測できる。

<引用文献>

- 榎本文雄、初期仏典における涅槃 無我説と関連して、仏教研究、40、2012、149-160
藤田宏達、涅槃、岩波講座・東洋思想 インド仏教 2、第 9 巻、岩波書店、1988、264-286
片山一良、パーリ仏教における涅槃、駒沢大學佛教文學部研究紀要、第 59 号、2001、462-478
宮治昭、ストゥーパの意味と涅槃の図像 仏教美術の起源に関連して、佛教藝術、122、1979、89-116
K. R. Norman、Mistaken Ideas about Nibbana、*Collected Papers*、vol. VI、Oxford、1996、9-30

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 加治 洋一、杉本 瑞帆、田中 裕成、富田 真理子、中西 麻一子、横山 剛	4. 巻 3
2. 論文標題 漢文読解『破僧事』巻第一	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 対法雑誌	6. 最初と最後の頁 188～139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34501/abhidharmastudies.3.0_188	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 漢訳仏典研究会：加治洋一・杉本瑞帆・田中裕成・富田真理子・中西麻一子・横山剛	4. 巻 4
2. 論文標題 「漢文読解『破僧事』巻第二」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『対法雑誌』	6. 最初と最後の頁 188 -137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34501/abhidharmastudies.4.0_188	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富田真理子	4. 巻 32
2. 論文標題 「パーリ語初期仏教経典における二種涅槃界への展開」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 真宗文化 真宗文化研究所年報	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 富田真理子	4. 巻 57
2. 論文標題 Philological Study on Nibbana-related Words in the Suttanipata and Its Commentary Paramatthajotika	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 待兼山論叢	6. 最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 富田真理子	4．巻 34号
2．論文標題 パーリ聖典『スッタニパータ』における涅槃 註釈『パラマッタ・ジョーティカー』の解釈と比較して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 パーリ学仏教文化学	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1．発表者名 TOMITA Mariko
2．発表標題 Philological Study on Nibbana-related Words in the Suttanipata and Its Commentary Paramatthajotika
3．学会等名 World Sanskrit Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1．著者名 富田真理子	4．発行年 2024年
2．出版社 山喜房佛書林	5．総ページ数 318
3．書名 初期仏典における涅槃について 『スッタニパータ』を基本資料として	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--------	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------